

# 脅かされる生存権

## 持続可能性への取り組み

国連では1972年の「人間環境宣言（ストックホルム宣言）」以来、人口、環境、食料、資源、気候問題などに関連した多くの提言を行ってきた。1992年には「環境と開発に関するリオ宣言」「アジェンダ21」が採択され「生物多様性条約」(1993)、「気候変動枠組条約」(1994)などもこれに続いた。

2000年には「国連ミレニアム宣言」を採択し、2015年までに8

つのゴールと21のターゲットからなる「ミレニアム開発目標（MDGs）」を設定。2015年にはMDGsの到達点を目指し、2030年までに人間、地球と繁栄のために行動する計画として、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs 17）」を掲げた。

今はこちらの計画の半分はある。戦争や疫病（Covid-19）によって世界中で人類の生存権が脅かされている現在、SDGsの基本に立ち返って、これらの目標を達成するための行動をさらに強化しなくてはならない。2019年に国連で開催されたSDGサミットでは、SDGsの取り組みの遅れや国際環境の悪化を総括して、2030年までの10年を「行動の10年」とすることが提唱された。

企業にもメリット  
SDGs計画の推進は、各国の政府だが、企業や個人も積極的にこの計画に関わって推進することが求められている。企業はSDGsの推進に関わることで①企業イメージの向上②社会的課題の対応③企業の生存戦略④新たな事業機会の創出、などのメリットがある。

反対にSDGsに無関心で、これに反するような経営を行っている、企業の社会的評判を落とし、不買運動などでその

脅かされている現在、SDGsの基本に立ち返って、これらの目標を達成するための行動をさらに強化しなくてはならない。2019年に国連で開催されたSDGサミットでは、SDGsの取り組みの遅れや国際環境の悪化を総括して、2030年までの10年を「行動の10年」とすることが提唱された。

体は各国の政府だが、企業や個人も積極的にこの計画に関わって推進することが求められている。企業はSDGsの推進に関わることで①企業イメージの向上②社会的課題の対応③企業の生存戦略④新たな事業機会の創出、などのメリットがある。

日本でも最も深刻な問題は、人間が環境に与えている負荷（エコロジカル・フットプリント）EFが地球資源の再生能力（バイオ・キャパシティ）BCを大幅に上回っていることである。EFとBCの比は全世界でも1.75の値で、環境への負荷が再生能力を上回っている。

また一人当たりのエネルギー使用量の削減、一般廃棄物の排出量の削減、使い捨てプラスチックの使用削減、公共交通機関の利用など、個人レベルでもSDGsの推進に貢献できることはたくさんある。

再生能力を上回る負荷  
日本でも最も深刻な問題は、人間が環境に与えている負荷（エコロジカル・フットプリント）EFが地球資源の再生能力（バイオ・キャパシティ）BCを大幅に上回っていることである。EFとBCの比は全世界でも1.75の値で、環境への負荷が再生能力を上回っている。

さらに日本ではEFが

4・61、BCが0・59なので、その比は7・8倍となり、負荷の方が再生能力よりも圧倒的に大きくなっている。

これらの値の単位はグローバル・ヘクタール（g ha）で、1人当たりの土地面積に換算されている。日本人が生活していくためには1人当たり約4 haの土地を外国から借りていることになる。

高いEF/BC値には諸外国と比べて圧倒的に低い日本の食料自給率と莫大な食料輸入が影響しているが、食料以外の資源やエネルギーの外国依存も計算に入れた上での値である。

各国と地域のEFを世界のBC平均値（1・58）と比較すると、地球何個分の生活をしているかが分かるが、日本は

各国における1人当たりの環境負荷（2018）

国	EF	BC	EF/BC	地球何個分
日本	4.61	0.59	7.78	2.91
中国	3.80	0.92	4.11	2.40
インド	1.21	0.45	2.71	0.76
アメリカ合衆国	8.12	3.39	2.40	5.13
アフリカ平均	1.35	1.15	1.18	0.85
アジア平均	2.45	0.75	3.25	1.55
ヨーロッパ平均	4.76	3.00	1.59	3.01
中南米平均	2.47	5.08	0.49	1.56
北アメリカ平均	8.12	4.54	1.79	5.13
オセアニア平均	6.93	11.16	0.62	4.38
世界平均	2.78	1.58	1.75	1.75

注) EF: エコロジカル・フットプリント、BC: バイオ・キャパシティ

(単位: 1人当りのグローバル・ヘクタール)、引用元 <https://data.footprintnetwork.org/#/>

は北アメリカ、ヨーロッパ、日本など先進国におけるEFを減少するように努力する必要があるがアジア、中南米、アフリカなど発展途上国では生活レベル向上のためにEFの増大はやむを得ない。他方バイオ・キャパシティBCは全世界で高めないといけない。

本連載の主なテーマであった農業や土に関して①土壌侵食の防止②土壌の有機物を保全し増やす③健全な方法で作物の生産性を上げる④農畜産廃棄物を適正に処理し利用する⑤森林や湿地を保全する、などはSDGsの推進にかなっている。次回からSDGs全体で私が関心を持った農業、環境、エネルギーなどの分野に限定して述べたいと思う。

2・9、ヨーロッパ平均は3・0で中程度である。アメリカ合衆国は5・13で非常に高い。アジアと中南米は1・55で世界平均よりわずかに低い。アフリカとインドは1・0以下で非常に低い。

SDGs推進のために